

序章 異界が口を開けるとき

浜 本 隆 志

異界とは 異界は日常社会や現世から離れたところに存在するとされるが、これはいったいどのような世界なのだろうか。日本やヨーロッパの神話、民話において、たえず異界との交流が語られているので、先人たちの異界観を確認することは容易である。日本でいえば『海幸山幸』の海神の宮、『浦島伝説』の竜宮城、『日本書紀』のスサノオが追放された「根の国」、『竹取物語』の月世界などが想起される。また沖縄伝説に描かれている、海上彼方の「ニライカナイ」もそれにあたる。

ヨーロッパではギリシャ神話の楽園「エリュシオン」、メデューサが住む西方の黄泉の国、ケルト系神話における『アーサー王物語』の異界との交流、北欧神話の氷と雪に覆われた死の国「ニブルヘイム」、『聖ブランドンの航海譚』のこの世とも思えぬ島々をめぐる話、グリム童話の『ホレおばさん』の地下世界などに、不思議な異界が生き生きと描かれており、この世界は現代人にとっても、尽きない興味とファンタジーを与えてくれる。

人間が考えだした異界は多様であるが、日本では日常世界から離れた天上、山奥あるいは海上が多く、ヨーロッパでは森、洞穴、地中、泉などのイメージがそれに当てはめられてきた。神話や民話では、異界は現世の人びとが近寄りがたい場所であるが、主人公はそこへの行き来が可能であり、以上述べた話からも理解できるように、異界



図序-1 悪魔や怪物が地獄へ落ちたものを食べる
(ローラー・ウォード・他 『悪魔の姿』、13世紀、フィレンツェ)

から帰還する英雄譚も少なくない。また多くの場合、異界は無時間の世界であって、現世との時間の経過に大きな落差が認められる（『浦島伝説』など）。

なお宗教的な意味における異界は、キリスト教、イスラーム、仏教を問わず、多くの場合、天国と地獄という両極の世界に集約される。その前提として死後の靈魂が消滅しないというのがテーゼであるが、魂の再生や復活を願って、各種の葬送の方法、ミイラや再生の儀礼がおこなわれてきた。キリスト教では死後、魂は神の「最後の審判」を受け、生前の善悪の行為によって天国や地獄へ振り分けられる。たとえばフランスのシャルトルの大聖堂では、黄泉に通じる西方の薔薇窓に教訓的な「最後の審判」の情景が描かれている。

では異界には何が存在しているのであろうか。とりわけ宗教的な天国と地獄については、具体的な図像が多く残っている。天国はどちらかといえ

ば、奇抜なイメージではなく、亡くなった親族と再会し、果実の実る花園で楽しく過ごしたり、天上の光に満ちた理想の世界で暮らしたりする光景が呈示された。それに反して地獄は、図序―に引用したように、罪人が悪魔や怪物によって徹底的に責めさいなまれるという恐ろしい修羅場として描かれてきた。いうまでもなくこうした図像の威嚇によって、宗教者は人びとを戒める効果をねらったのである。

しかし異界は遠く離れたところにだけあるのではなく、現実には身近な日常生活とも密に接していた。ヨーロッパ中世では、ミクロコスモス（小宇宙）とマクロコスモス（大宇宙）という二つ概念があったので、ここから異界のイメージが明確に理解できる。両者は中世都市構造から類推されたコスモロジーであるといえよう。すなわちミクロコスモスは、城壁に囲まれた都市内を意味し、ここでは秩序ある日常生活が営まれていた。しかしその外側に、人間の手のおよばないマクロコスモスがあつて、非日常の異境の世界が広がっていた。

とりわけヨーロッパにおける身近な異界は、当時、うつそうと茂った深い森であつた。たとえばグリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』では、森のなかで魔女が子どもたちを待ち構えており、『赤ずきん』では、そこに恐ろしいオオカミが住んでいた。古代や中世の人びとは、森をこのような異界のイメージでとらえ、得体の知れないものが徘徊する棲家と見ていたのである。

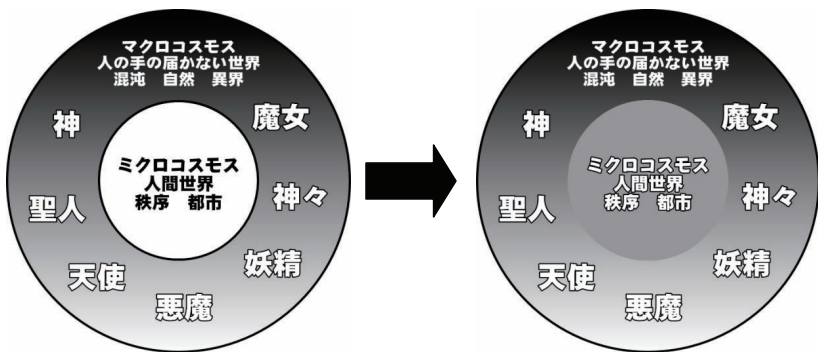
マクロコスモスには、たしかに悪魔、魔女、妖怪が生息し、さらに病氣、不幸、死、嵐、天変地異なども日常外の異界で生みだされる。しかしネガティブなものばかりではなく、人間を救済・加護してくれる神、先祖霊、精霊もそこに存在していた。これらが来訪神となつて現世に出現するのであるが、それを大別すると、一方では豊穡やプレゼント、幸せを与えてくれる慈悲深い神や祖霊、他方では災難や不幸をひき起こす悪霊や悪魔と二分される。要するにマクロコスモスは、神秘的なものや人間の力では手に負えないものが存在し、それが日常世界のミクロコ

スモスへ流入すると考えられていた（図序―2）。

異界はふつつ閉ざされているが、日常世界に住むものは神の加護を願い、悪霊をひたすら避けた。しかし人びとは悪霊の住む異界と接しなければならぬ時がある。たとえば夜になると、この世と異界の境界が消え、不気味で恐ろしい世界に遭遇する。また人間は何が生息しているかわからない深い森にも入らねばならないし、遠い異国にも旅立たねばならない。

さらに天変地異が起きた時、異界の得体の知れない力を思い知らされる。病氣や死に遭遇すると、人びとは恐れおののき神に祈り、悪霊から逃れようとした。ミクロコスモスとマクロコスモスの両世界の境界には出入り口があつて、それは日常世界のなかでは、中世都市の市門、十字路、橋、港などであり、家屋でいえば土間の敷居、竈、煙突、窓である。サンタクロースが煙突から出入りするという伝説は、この異界観から生みだされたものである。さらにヨーロッパのルネサンス時代の庭園にも、地下世界に通じる入り口が設けられ、異界との通路が構築されていた（図序―3）。

以上のように日常世界でもこうして異界と接触することがあつたけれども、しかしそれ以外にも、人びとは独自の異界との交流



日常のミクロコスモスと非日常のマクロコスモスが分離した状態

異界が口を開けると、ふたつの世界の境界線が消え、両方の行き来が可能となる

図序―2 異界が口を開けるとき



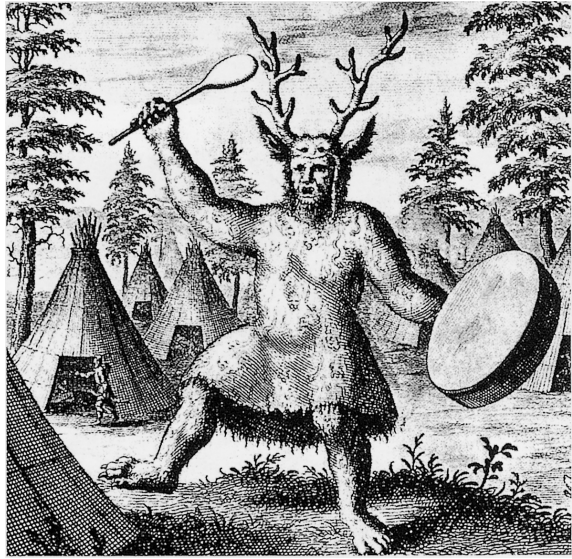
図序-3 怪物が口を開ける異界の入り口
(Becher-Huberti, Manfred: *Lexikon der Bräuche und Feste*)

を考えた。異界との各種の交流儀礼は古代から連綿とした歴史を有するが、とりわけ異界が口を開くのは、以下に詳述する非日常の祭りの時空であった。

異界との交流儀礼 原初ころから人間は、畏怖すべき異界にいる神や霊との交流をおこなう際に、身近にいる動物にこれらの願いを託した。とりわけ鳥は自由に天空を飛ぶことが可能であるので、異界を行き来できるものとされた。神話が語るよ

うにワシ、タカ、ワタリガラスがそうであり、チベットにはいまでも鳥葬という葬送儀礼がある。すなわち人びとは、死者の魂を鳥によって天上へ運んでもらおうとしたのである。その類推から異界と行き来できる女神、天使、魔女、妖怪の空中飛行伝説が生まれた。

さらに人間より強いクマ、ウマ、ワニなどの動物も異界と交流できるものとされた。たとえばアイヌの重要な儀礼であるイオマンテのクマ、またゲルマン神話の主神オーディンの乗るウマが、神や異界と交流する動物とみなされてきたことはよく知られている。日本にもワニが海上の異界からあらわれるワニ伝説（「トヨタマビメ伝説」）が残っている。この場合、動物が神そのものという解釈と、それが使者であるという二種類の見方があった。中沢新一氏によると、原初の狩猟採取時代には前者の考え方が主流を占めていたという（『対称性人類学』参照）。



図序-4 毛皮をかぶって動物に変身するシャーマン
(Neuwald, Nana: *Bärenkraft und Jaguarmedizin*)

後者としては日本の稲荷信仰が典型例であるが、ここではキツネが神の使者であり、神霊を告げるものとされる。それは田の神を祭る農耕儀礼で、京都の伏見稲荷大社が本宮であって、キツネの像が境内に置かれている。キツネ信仰は全国各地にも広がり、とくに農村部での信仰が厚かった。なおキツネ憑き、キツネ落としてはそのネガティブな事例である。

原始人や古代人は、人間と動物の間には境界がなく、独自の儀礼を通じて、相互に変身が可能であると考えていた。超能力をもった動物の霊力によって、かれらは動物に変身して、神との交流をおこなった。図序-4に引用するのは動物の皮をかぶって、神との交流をはかっているシベリアのシャーマンの姿である。かれは動物の毛皮を身につけることによって憑依し、悪霊を追い払って、神の加護を祈願したのである。ところがいまでもなく、動物を介さず、人間自身も当然、直接的に神や霊と交流を試みた。古来、特別の能力をもつ男女のシャーマンや神官、司祭、巫女、采女^{うねめ}、口寄せ女^{うねめ}がその役割を果たしてきたが、とりわけ古代から、シャーマンが部族の儀礼を取り仕切っていた。

その儀礼の場合、祈祷や呪文だけでなく、リズムミカルな太鼓などの音もトランス状態に入りやすくする効果があ

った。また笛にも魔力があるという伝説はヨーロッパだけでなく、日本にも伝わっている。「笛吹き男」伝説が不気味なのはそのせいである（第四章参照）。シャーマンの本質的な特性は、エリアーデの定義によると、「エクスタシー」と「ポゼッション」（憑依）であるといえる。こうしてかれは憑依の状態に入り、自由に神との交流をおこなったのである（エリアーデ『シャーマニズム』参照）。

憑依の場合、神や霊が乗り移るわけであるから、これらを呼び寄せるということになる。しかしシャーマン自身が脱魂し、みずから神のもとへゆくパターンもある。それ以外に、神官や司祭、巫女たちは神との仲介を果す役割を担っている。このように神との交流にも多様なかたちがあったが、来訪神信仰では脱魂した神のもとにゆく方向ではなく、その逆の神を呼び寄せる、あるいは仲介するかたちを問題にする。

古来、こうして人びとは異界にいる神との交流儀礼をもっとも重視してきた。とくにヨーロッパの考古学では儀礼の場所として、洞窟の事例がよく引き合いに出される。かつて洞窟は生活の場であるとともに、生命の生まれくる子宮とみなされ、聖なる場所とされてきたからである。ここに住む神は原始時代にはふつう女神とされ、それは命を育む地母神であり、人間に豊穡を与える存在であった。いわば洞窟は、神との交流の場であり、冥界にもつながる神聖な場所であったのだ。

旧石器時代後期のクロマニヨン人遺跡として、フランスのラスコーの洞窟絵が有名である。これは紀元前三万年前から紀元前八千年前のものと推定されており、ここには角を生やした野牛の狩りの光景が生き生きと描かれている（図序―5）。獲物の野牛は腸を裂かれ、神に供儀として捧げられていると判断される。その側に横たわっている人間はシャーマンと推定され、恍惚状態に陥って、勃起したペニスをみせている。

かれは、槍とおぼしき武器を使用していて、さらにくちばしを突きだしたトリの仮面をかぶっているように見え



図序-5 トリの仮面をかぶったシャーマン
(Devereux, Paul: *Der heilige Ort*)

する特性をもっていた。神無月という言葉や出雲に神々が集まるといふ伝説があるように、神々は移動すると信じられてきたからである。

異界が口を開けるとき 神を迎える儀礼は、病氣治療などのときに随時おこなわれた場合と、定期的に季節の移り変わりとともに設定される場合があった。後者がいわゆる祭りの日であるが、このハレの日には、松、竹、木など

る。横にもうひとつ鳥をかたどった杖が置かれている。この絵から暗闇、動物、生贄のプレゼント、トリという各種の祭りに馴染み深いキーワードを読み取ることが可能である。少なくともこの暗闇のなかで、トリを媒介にして神と交流をする儀礼がおこなわれていたとみられる。洞窟におけるシャーマンの忘我のエクスタシーは、神との一体化したなかで豊穡への祈りではなかったか。

このようにシャーマンが洞窟へ神を呼び寄せて、祈願をしていたのは、神が移動するものと考えられていたからである。これがいわゆる来訪神信仰の原型である。たしかに日本の場合、村には土着の産土うぶすなの神がいて、鎮守として崇められていた。そして村人はこれを村落の近くに造営し、日常的に神と人間が接触する場所とした。しかし一般に先祖霊や神が鎮守の森や神社に常駐していたわけではない。日本でも神はもともと遠方におり、祈れば来訪

の扱^{しら}り代を立てて、遠方から神が訪れることが可視化された（二七ページ参照）。よく知られているように、折口信夫はこれをマレビトという概念で説明したが、秋祭りの主役である神輿^{みこし}には神が鎮座し、屋根に鳳凰や鳥をシンボル化して飾った。これによって人びとは神の移動をあらわした。

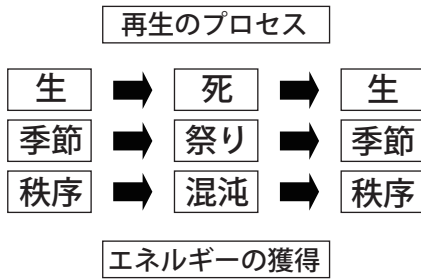
祭りは生活のリズムと密接にかかわって設定され、太陰暦、太陽暦にもとづき、季節の変わり目に祝われた。とくに北半球では秋から冬、そして春の時期を中心に祭りが展開される。農耕民にとってはこの時期は収穫が終わった農閑期であり、豊かな稔りを神に感謝する意味が込められていたからである。

同様に牧畜民にとってもそれは、夏の家畜の放牧から、冬に家畜を小屋に入れて飼育する仕事の転換期である。この時期に設定されている冬祭りは、神に家畜の恵みを感謝する場であり、日常の連鎖から外れた非日常のハレの神聖な日であった。もちろん祭りの日には労働は禁止されていた。

とりわけ冬祭りのなかでも、北半球では冬至が太陽の最も弱くなる日であるので、この日を中心に最大の祭りが催されていた。エリ阿德がいうように「何千年の間、人々は太陽が冬至にあたって、永遠に消え去ってしまうかも知れぬとの恐怖に苦しめられ、また月が再びのぼって来ぬかも知れず、植物が永遠に死んでしまうかも知れぬ恐怖に悩まされてきた」（『大地・農耕・女性』）からである。この状態から再生する太陽は、古人のもっとも切実な願望であって、そのために神に祈る冬至祭が設定されたといえる。

季節の切れ目には異界が開くと、マクロコスモスから神だけでなく妖怪や悪霊、死者の靈魂も登場した。したがって来訪神には慈愛と威嚇という二面性が付与されているのである。冬至祭の例でもわかるように、季節の変わり目は恐ろしい危険な日でもあった。

それを追ひ払うために、たとえば正月の前の大晦日の晩にナマハゲが登場するし、ヨーロッパで二月六日に祝



図序-6 祭りの機能

われる聖ニコラウス祭でも、前夜祭の一二月五日に慈愛に満ちた聖ニコラウスとともに、恐ろしい怪物クランブスが出現する。同様にヴァルブルギスの夜祭りでは、メーデーという春の祝典の前夜である四月三〇日に、魔女のサバトが開かれたという。さらに一一月一日の「諸聖人の祭り」の前夜祭として、一〇月三一日のハロウィーンには怪物が登場する。

これらの季節の切れ目の祝祭は、前夜祭として夜におこなわれる場合が多い。まさしく夜の暗闇のなかで異界とこの世が融合し、境界がなくなる時空がつくられ、来訪神と怪物、そして人間のドラマが展開される。異界は非日常、夜、死の世界であるが、そこではすべてが融合し、混沌の世界がつくりだされる。

人びとは祭りの時空のなかで、神話や伝説にもとづく世界を追体験し、神との交流によって人間や共同体を再生しようとしたのである。さらに異界を通じ、ケガレや禊ぎをおこなえば、自然も新しい生命を誕生させ、宇宙の秩序もよみがえる。まさしくそれが祭りの本質的な存在理由であったといえる。このプロセスを図式化すると上のようになる。

以上の論述では、ヨーロッパや日本の地域性をほとんど度外視し、来訪神や祭りの総論的な特性について述べてきた。しかし厳密に言えば、それぞれの地域性は存在する。たとえば日本の場合、来訪神のイメージは神と先祖霊が一体化している傾向が強い。日本古来のアニミズムでは、自然には神が内在し、それは先祖霊に収斂されていくものであったからである。

ところがヨーロッパの場合、もっと複雑である。というのも多くのキリスト

教の祭りは、それ以前の異教の祭りを継承しつつデフォルメし、あきらかにその上にキリスト教の祭りを接木しているからである。すなわちヨーロッパの来訪神信仰は、異教とキリスト教の二重構造のなかで形成されていることがわかる。キリスト教祭りのルーツをたどっていけば、いかに多くの異教の習俗がキリスト教に流入していたかが見えてくるが、具体的な二重構造は、以下の論述において明らかにしてみたいと思う。

われわれの研究対象地域は日本とヨーロッパを中心にしたが、そのみではなくさらに、フィリピン、太平洋のハワイにおいて、来訪する神や祖霊を人びとがどのように受け入れて、接待し、を送り出していたのかも検討してみた。本書の眼目は、世界各地の来訪神信仰が普遍的にいったい何をあらわし、人間の日常生活にとってどのような役割を果たしていたかを解明することにある。

たしかに日本の正月、ヨーロッパのクリスマスが来訪神信仰と密接に関わるものであることはよく知られている。これらの研究は日本でもヨーロッパでも数多くあるので、われわれは、第一章で来訪神とのかかわりからよく知られた祭りについては概要を述べるにとどめた。主眼をそれ以外の祭りや習俗に焦点を合わせ、おもにこれらの解明を試みた。とりわけ本書で取り上げた歴史的事件と深くかわる「笛吹き男」と「キャプテン・クック」を「異人」ととらえるならば、来訪神信仰の地平をはるかに拡大することが可能となろう。

終章ではさらに来訪神信仰研究が過去のものではなく、現代あるいは未来にとっても重要な問題提起をしていることを指摘した。来訪神を無視し、人間万能の思想がいかに地球規模の危機状況を生みだしているかを直視すれば、本書のテーマが現代のわれわれにとっても、アクチュアルな課題であることを理解していただけるものと思う。

本書は、関西大学東西学術研究所の「世界習俗研究班」の研究員グループが、来訪神信仰についてフィールドワークや文献調査をした成果をまとめたものである。そのプロセスのなかで、科学研究費を申請し、採択されて研究

を推進することができたのは幸いであった。研究を支援していただいた同研究所の橋本征治前所長、松浦章現所長にお礼を申し上げる。

参考文献

- ローラー・ウォード・他 『悪魔の姿』 小林純子訳 新紀元社 二〇〇八年
ミルチア・エリアーデ 『シャーマニズム』 堀一郎訳 筑摩書房 二〇〇四年
ミルチャ・エリアーデ 『大地・農耕・女性』 堀一郎訳 未来社 一九九六年
中沢新一 『対称性人類学』 講談社 二〇〇六年
Becher-Hubert, Manfred: *Lexikon der Bräute und Feste*, Freiburg im Breisgau 2000.
Neuwald, Nana: *Bärenkraft und Jagarmedizin*, Aarau Schweiz, 2001.
Devereux, Paul: *Der heilige Ort*, Baden und München 2006.